

# 村 次郎（むら・じろう）

## 1、プロフィール

八戸の海辺の風景を愛してやまない孤高なる詩人。八戸ルネッサンスの創始者。家業の旅館「石田家」を継ぐため文学活動は放棄したが、制作者としての生き方を持続。

<生没>

1916(大正5)年5月4日 ~ 1997(平成9)年11月10日

<代表作>

『忘魚の歌』『風の歌』(あのなっす叢書)未刊詩集『途上』『帰国』『餘業詩集』  
『海村』『鮫角海岸段丘』『蕪花群鷗』

<青森との関わり>

三戸郡鮫村(現八戸市)生まれ。鮫尋常高等小学校、県立八戸中学校卒業。中国大陸から復員後八戸市鮫町に在住。

## 2、作家解説

昭和 27 年家業の「石田家」を再建、旅館主となって以来数十年、作品発表を拒否、沈黙を守った。

昭和 10 年慶応義塾文学部予科入学以来、仏文科卒業まで同人誌「塾文科」「文科」「山の樹」「詩集」に参加し作品を発表、他に「三田新聞」「四季」に応募入選作品が掲載、また「文芸汎論」「文化評論」「三田文学」「新文化」などに依頼作品を発表。終戦後の混乱期の中、八戸ルネッサンスというべき「あのなっす・そさえて」を設立。あのなっす叢書を刊行。それは宮原元平(石橋正一郎)に勧められて孔版印刷の詩集『忘魚の歌』を発行したことがきっかけであった。後に『風の歌』を発行。両詩集は昭和60年に「あのなっす復刻委員会」から復刻版が刊行された。家業を継ぐため文学活動は放棄したが、制作者としての生き方を依然として続け、詩人のみならず歌人、俳人、作家、画家、民俗研究家等各分野に渡って幅広く強

い影響を及ぼしている。司馬遼太郎が『街道をゆく』で紹介していた「村次郎言語論」は理論の整備が進み、各方面に大きな影響を与えている。草野心平、芥川比呂志、中村真一郎、堀田善衛等とも親交が厚く、さらに郷土出身の作家、夏堀正元、三浦哲郎にも影響を与え、中央文壇では現在でも話題にのぼっている。(参考文献、詩誌「朔」99号「あのなっす叢書とその復刻の経緯」圓子哲雄著)

### 3、資料紹介

○詩集『忘魚の歌』

図書

1947(昭和22)年(復刻)

237mm×170mm

第一詩集であるこの作品集は知友にのみ献ずる意図で宮原元平の孔版印刷により少部数を発行。昭和11年より17年の応召の日までに制作されたものである。「幼年集」「啄木鳥集」「冬里集」「暮季集」と作者の詩精神の彷徨により作品を配列。